

語られないこと、語りだされる時

不妊の喪失の語りを聴くプロセスから

What aren't narrated and when those are begin to narrate

: From the process of listening to the narratives of a woman's infertility loss

安田裕子

Yuko Yasuda

衣笠総合研究機構

Kinugasa Research Organization

Key words: 不妊経験, インタビュープロセス, 変容

目的

インタビューが進むなかで、語り口が変わったり、新たなことが語り出される瞬間がある。それは、語り手と聴き手の相互行為（質問の仕方や関係性）によるが、一方で、語り手のなかで経験が熟したことに大きく起因していると思われることもある。人が、経験を意味づけ自己をかたちづくる存在であることを踏まえれば、そうした語りには、語る本人の発達的変容を見て取ることができるだろう。本発表では、相互行為よりむしろ、語り手側で経験が熟したことよると感じられる語りの変化に着目し、それを捉えることを通じて、当事者の経験の意味づけを読み解くことを目的とする。

方法

不妊治療経験および子どもをもつことに関する非構造化インタビューを行った。対象は、現在治療をしている女性ここみさん（仮名、初回インタビュー時35歳）である。2010年5月、8月、2011年5月に、1・2回目はカフェで、3回目は事務所の一室で実施した。すべての語りデータをICレコーダーで録音し、文字起こしをした。本人にとって重要な転機の語りを捉えつつ語りデータを精読し、語りの変化を捉えた。

結果

ここみさんの不妊治療経過を表1にまとめた。

年月	治療内容
	勧められて検診を受け、甲状腺の機能低下と子宮筋腫が見つかった。前者は投薬、後者は7カ月後に切除し、6か月間子宮を休めた。その後、不妊治療を始めた矢先に卵管閉塞が見つかった。
200W年X月	体外受精 2つ採卵→授精せず
200W年(X+3)月	顕微授精 3つ採卵→1つ授精→着床せず
200W年(X+6)月/ (X+10)月	顕微授精 3つ採卵→2つ授精→着床せず
4か月間生理を止めて子宮を休めた。	
(200W+1)年Y月	自然に生理が始まらず、不妊治療を休み、体質改善のために漢方薬を開始した。
(200W+2)年Z月	顕微授精を再開 1つ採卵→授精→凍結 漢方薬は継続する（現在に至る）。

表1 ここみさんの不妊治療経過

「甲状腺機能低下と子宮筋腫の発見」は、ここみさんにとって、考え方や価値観が変容するきっかけとなった重要な出来事であった。すなわち、高度生殖医療を試みながらも不妊治療に猪突猛進するのではなく、子宮を休めたり、漢方薬で体質改善を図ったり、顕微授精した受精卵をすぐには移植せずに凍結し体質改善に努めるというように、自らの身体に向き合おうとする姿勢につながった。また、このことは、いのちの神秘やスピリチュアルな世界を意識する契機となり、いのちの誕生を考える活動に従事するようになるという、日常生活における行動の変容と拮抗りにむすびついた。

なお、この出来事は、インタビューの始めの段階で治療経過を説明するなかで簡潔に触れられたことと認識されたが（それほど淡々と語られた）、その後のインタビューにおいて繰り返し語られ意味づけがなされていった。

考察

不妊は喪失体験である。基本的に痛みに強く、チャレンジングな性格であると自負するここみさんも、インタビューにおいてやりとりするなかで、「人間としての自信をなくした」「子孫を残しておく能力がないのかという哀しい気持ちになった」と語っている。ただ、こうした喪失感を時に吐露しながらも、ここみさんは、不妊治療一辺倒になるのではなく、自らの身体・生活・人生について、長い時間軸に位置づけて語りを展開していた。治療中の多くの人が受胎を目指し治療結果に執着し、それゆえしんどい状況に陥ることを考えれば、治療過程においては治療をすることにのみ意識を向けるのではなく、こうした視野の広がりを有しておくことが非常に重要になってくるといえる。その点において、ここみさんの不妊経験の語りは、治療中の閉塞状況をいかに和らげるかに関するひとつのモデルを与えてくれるだろう。また、インタビュープロセスにおける語りの変化を捉えることは、インタビューではもとよりカウンセリングにおいても、語り手の経験世界に入り込み理解を深め、語る本人の意味づけや変容（発達）を促進することにつながると考えられる。